

岐阜大学の竹内章郎は、『いのちの平等論 現代の優生思想に抗して』（岩波書店、2005年）で「即ち、そこではこの歴史の主体として焦点を合わされるものが普遍的理想ではなく、個々の現実存在ではないこと、結果的に人間という存在者の定義が曖昧になっていることが問題であると言えないか。こうした普遍的理想のみを追い求め、現実存在を忘却しがちな（排除さえする）優生思想は、人間の普遍的な問題である」「優生思想が、ナチスドイツなどに特有のごく一部の狂信集団の思想ではなく、プラトン以来、どの時代にも存在し、また現代でも存在している普遍的な思想である。」と。

誰にでも「内なる優生思想」がある。自分と他人を比較し、自分に優位を感じて満足する。または、その逆も。他人と他人を比較し、優劣をつけてしまう。容姿や性別、性的指向、疾病や障がい、状況、経済的状況、学歴、社会的地位、さらに、ひろげると、くに、民族、人種、宗教…今年も黒人男性が白人の警察官に殺された。全米に広がった抗議デモで人々が訴えた言葉、今や世界に広がっているこの言葉「Our lives matter, Black lives matter」（私たちの命は大切。黒人の命は大切だ。）から、私たちは、何を学ぶべきか。

ここで思い出したのは、元東京都知事の石原慎太郎だ。2020年7月、ツイッターに「業病のALSに侵され自殺のための身動きも出来ぬ女性が尊厳死を願って相談した二人の医師が薬を与え手助けした事で『殺害』容疑で起訴された」と事件を説明し、「武士道の切腹の際の苦しみを救うための介錯の美德も知らぬ検察の愚かしさに腹が立つ。裁判の折り私は是非とも医師たちの弁護人として法廷に立ちたい」と投稿。業病：前世の悪業の報いがかかるとされた、治りにくい病。難病。これまでも、水俣病患者に対して「これ（抗議文）を書いたのはIQが低い人たちでしょう」、重度障害者が治療を受けている病院を視察し、「ああいう人ってのは、人格があるのかね」「絶対よくならない、自分が誰だかわからない、人間として生まれてきたけれど、ああいう障害で、ああいう状況になって」「ああいう問題って、安楽死につながるんじゃないかという気がする」、また、サンフランシスコで同性愛者のパレードを目にした石原は、「見てて本当に気の毒だと思った。男のペア、女のペアあるけど、どこかやっぱり足りない感じがする。遺伝とかのせいでしょう。マイノリティーで気の毒ですよ」と発言した。そして、記憶に新しいのは、杉田水脈衆院議員の「LGBT支援の度が過ぎる、生産性がない」発言だ。麻生太郎副総理に至っては、性差別発言のみならず、問題発言が盛りだくさんである。政治家が、差別を煽ってどうするのか、撤回や謝罪ですむことではない。